

高校野球・選手宣誓の時代性

陣内正敬

(関西学院大学)

jin@kwansei.ac.jp

キーワード：高校野球 選手宣誓 時代性 抑制 対応分析

はじめに

本稿は陣内(2008)の続編である。ここでは、甲子園で行われる選抜高校野球(春の大会)と全国高校野球(夏の大会)の開会式で行われる選手宣誓をデータとして、その宣誓文と宣誓行動の時期的推移を分析した。その結果、1980年代を境に、それ以前と以後とでは、宣誓文、宣誓行動両面において大きく異なっていることがわかった。より詳しく言えば、1984年夏の宣誓が画期となり、それまでの定型的なものから、それ以降の多様化・個性化したものへと変化していく傾向が明らかとなった。同論考では、これを、宣誓文の長さ、出現語彙、音調、パラ言語などの面から分析・考察した。長い歴史を持つ高校野球の甲子園大会であるが、1980年代以前の選手宣誓については、その全文が確認されるものはそれほどなく、また映像資料として選手宣誓の初めから終わりまでを完全に確認できるものはきわめて限られていた。したがって、すべての大会を網羅することはできなかったが、限られた資料の中からも、上述のような傾向が明らかとなったのである。

さて、同論考を執筆し、また2009年3月にこの研究のまとめとして報告書を刊行し(陣内2009)、さらには、同年の8月には、ちょうど夏の全国高校野球の開催に合わせて、本研究の結果が朝日新聞紙上で紹介された(朝日新聞2009年8月8日朝刊)。この記事では、1984年の夏の大会でなされた坪井久晃氏(当時福井商業高校野球部主将)の選手宣誓が口火となって、宣誓内容が画一的なものから多様なものへと変わった、と紹介されていたわけであるが、実は、この記事(海外版)を読んだ米国在住の方から便りをいただき、このような変化はもう少し前にあったという指摘を受けた。それは、この方自身が選手として参加した1982年の京都地方大会において、まさに当時としては珍しい宣誓を聞いたというものであった。

1. 選手宣誓の改新时期

そこで、当時の新聞報道に当たってみた。すると、1982年7月19日付の京都新聞に「工夫をこらした宣誓」という小見出しで宣誓文の一部が紹介されていた。それによれば、洛星高校の青木武嗣主将（当時）による選手宣誓として、「体いっぱい声を出し、体いっぱいの汗をながし、打ち、走り、守り、燃えることを誓います。」との一文が紹介されている。さらに、同主将の談話として、「西野監督の提案もあって、本当に表現したい言葉を野球部全員から募集、それを検討して作りました。」とある。ここには、それまで踏襲されてきた定型（宣誓文1参照）を破り、自分たちの思いを自由に表現しようとする新たな姿勢が見て取れる。1984年夏の大会で話題になり、全国大会としては宣誓改新の先駆けとなった宣誓（宣誓文2）に込められた精神は、確かに、それより2年前の京都地方大会で出現していたのであった。

（宣誓文1）

宣誓。われわれ選手一同は、スポーツマンシップにのっとり、正々堂々と闘うことを誓います。

（宣誓文2）

宣誓。われわれ選手一同は、第66回全国高等学校野球選手権大会に臨み、若人の夢を炎と燃やし、力強くたくましく、甲子園から大いなる未来へ向かって、正々堂々、闘い抜くことを誓います。

このように、扱うデータを地方大会の選手宣誓にまで広げれば、この改新はさらに早まるかもしれない。ただし、少なくとも1980年まではその可能性は極めて低いと予想される。それは、陣内（2009）で、1980年夏の地方大会を報道した記事について全国の地方紙を調査しているが、収集できた33地方大会の中で、新しい変化を指摘したのは皆無であったからである。従来の定型の一部を紹介するか（33大会中15）、選手宣誓の写真はあっても、その文言については紹介もコメントもなし（同じく17）、という記事の書き方であり、これは明らかに目新しいものはなかった、ということを示している。

一方、1985年の夏の地方大会報道記事を調べると、実にさまざまな文言が百花繚乱のごとく出現する（陣内2009）。以下は抜粋である。

- ・うちに秘めた限りない技と力を…（埼玉）
- ・日ごろ鍛えた心と技をいかんなく発揮し…（千葉）

- ・憧れの甲子園目指して… (岩手)
- ・球児の夢を白球にかけ… (富山)
- ・湖国球児らしく… (滋賀)
- ・母校の榮譽のために… (京都)
- ・高校生らしくさわやかに全力で… (兵庫)
- ・輝く 21 世紀に向かって… (高知)
- ・本大会を人生の糧とする… (佐賀)
- ・一戦一戦完全燃焼することを… (宮崎)
- ・青春のすべてをかけて… (鹿児島)

1984 年夏の大会での選手宣誓が全国的な影響を与えたことがわかる。この時点で、調査対象となった 34 地方大会のうち、特段の紹介記事もないことから判断して、従来の定型を守ったと思われる宣誓は、調査対象 34 地方大会のうち 10 大会であった。一方、宣誓文の一部を掲載し、その新しさを紹介したのが同じく 24 大会であった。これから予想するところ、およそ 7 割の地方大会において何らかの改新が行われたということなる。

2. 宣誓文の対応分析

陣内 (2009) では、宣誓文における出現語句の年代的傾向を知るために、よく出現する典型的な語句を選び、それを宣誓年順にならべて対照表を作った (pp.10 - 11)。この表で取り上げた語句は次のようなものであった。

宣誓	我々	選手一同	スポーツマンシップ	則り	正々堂々
闘う	誓う	高校野球	甲子園	夢	舞台
感動	熱い			仲間	感謝

これはいわば主観的に取り上げたものであったが、その出現状況をみれば、70 年代的なもの、80 年代的なもの、90 年代以降のものなど、おおよその傾向がつかめるものであった。そこで、この観点を取りつつも、もうすこし客観的な分析を目指して、計量的テキスト分析ソフトを用いて語彙出現状況を把握し、また対応分析 (コレスポネンス分析) という統計的手法を用いることで出現パターンの特徴をより正確に抽出することを試みた。

2. 1. よく使われる語彙

まず、全文が確認された宣誓文を KH Coder 2.x にかけて、含まれる語彙を「名

詞」「動詞」「形容詞」などに分けた上で、その出現頻度を出した。なお、対象となった26の宣誓文を開催年代順に挙げれば以下のようなになる。

60年代 1968 夏
 70年代 1970 夏 1975 夏 1978 夏
 80年代 1980 夏 1983 春 1984 夏 1985 春 1985 夏 1986 春
 1987 春 1987 夏
 90年代 1990 夏 1992 夏 1994 夏 1997 春 1999 夏
 00年代 2000 夏 2001 春 2003 春 2006 夏 2007 夏 2008 春
 2008 夏 2009 夏
 10年代 2010 春

図1は、26回の宣誓文の中で、出現頻度が10以上の語を降順に並べたものである。

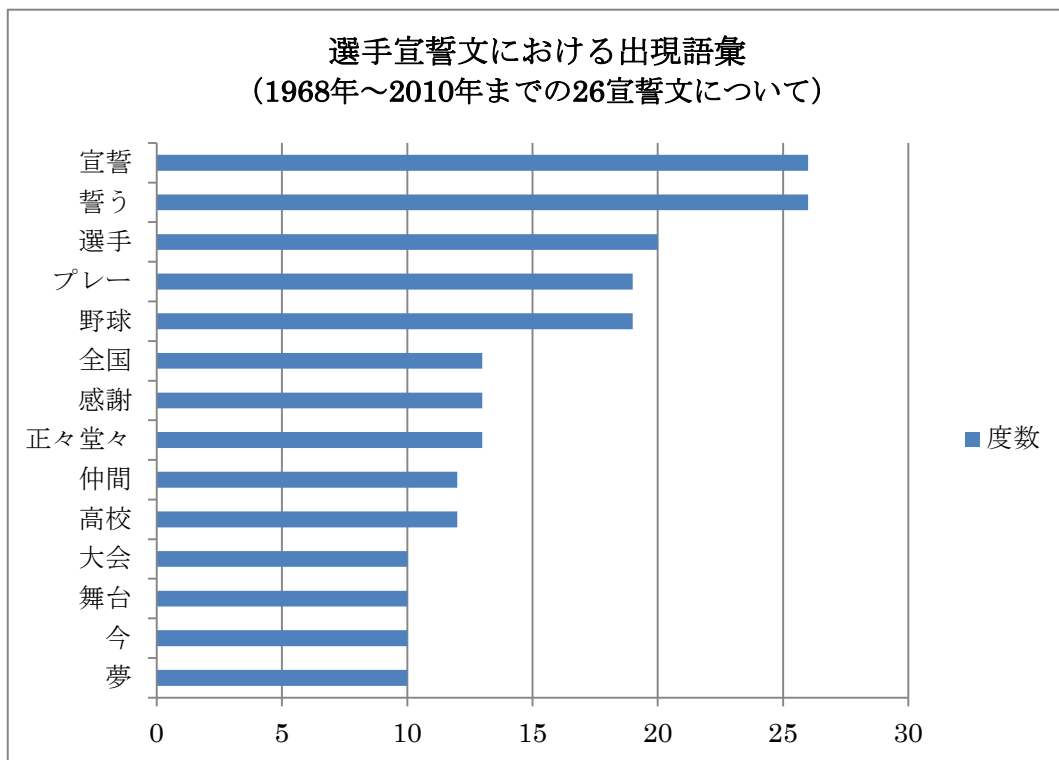


図1

上位から挙げると、「宣誓」「誓う」「選手」「プレー」「野球」「全国」「感謝」「正々堂々」「高校」「仲間」「大会」「舞台」「今」「夢」などとなる。各宣誓にはそれぞれ1回の出現が普通であるので、それからいけば、上位3語はほぼ常連、「野球」から「感謝」にかけてはほぼ2回に1回、それ以下はほぼ3回に1回の割合である。なお、KH Coderが数えた出現語彙（自立語のみ）の異なり語数は461語、延べ語数は2,116語である。

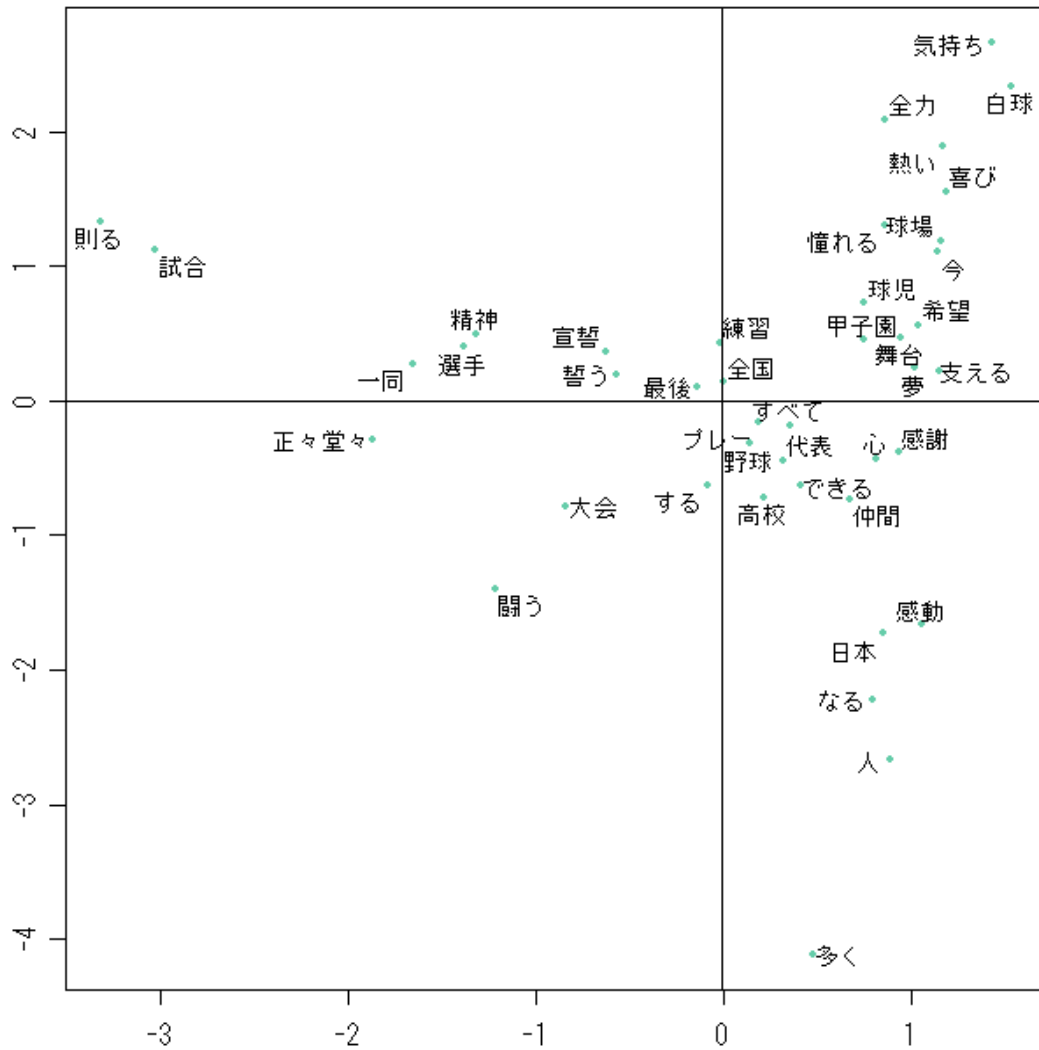


図2

2. 2. 語彙の出現パターン

前節と同様のデータを用いて、出現頻度が5以上の語について、対応分析（コレスポネンス分析）を行った。これは、出現語彙の出現パターンに応じて2次元の空間に布置する分析法で、よく一緒に出現する語同士が、出現パターンが似ていると判断され、近くに布置される。また図の中心に布置されるものほど一般性の高い語であり、逆に周辺部に布置されるほど特殊な語ということになる。図2はその布置図である。

まず、図の中心付近に注目すると、やはり前節で挙げた高頻度の語が布置されており、一般性の高い語であることがわかる。ただ、必ずしも頻度の高いものほど中心に布置されるわけではなく、宣誓文テキスト全体から見た位置取りとを考えなければならない。たとえば、「感謝」と「正々堂々」は同頻度であるが、出現環境がかなり異なり、離れている。

一方、左右の軸に注目すると、左側は定型的な宣誓文で出現する語彙が並んでいることがわかる。80年代以前に行われていた宣誓で中心的に用いられてきた語彙群である。逆に右側は90年代以降に出現する語彙群がみられる。左側に比べると多様性が大きいですが、その中でも、どちらかといえば下側（第Ⅳ象限）には「仲間」「感謝」「感動」「心」などといった「心理」語彙が表れるのに対し、上側（第Ⅰ象限）には「甲子園」「舞台」「全力」「白球」などといった試合や競技自体に関する語彙がみられる。

3. 宣誓文の時代的推移

さて、前節で描き出された語彙の出現パターンを、宣誓文の時代的変遷という観点から眺めるとどうなるか。SPSSの対応分析（コレスポネンス分析）を用いて、再分析を行った。

まず、KH Coder 2xの出現語彙リストの中から出現頻度5以上のものを取り出し、それぞれの語がどの宣誓文で出現しているのかを示した出現語宣誓文別対照表を作成した。出現頻度を5以上としたのは、あまり特殊な語は除くという意味と、2次元に配置した時にあまり煩雑にならない程度の語彙数を考慮してのことである。ただし、「スポーツマンシップ」「私たち」「人々」の3語については、出現頻度が5以下であったが、時代的特徴を示すものとして特別に追加した。これをSPSS ver.19の対応分析にかけた結果が、図3である。図2と比較してみると、全体的にはよく似た布置になっている。ただし、同じデータを用いたとはいえ、両者は分析の方法が異なっているので、各語の位置は多少異なっている。図3はあくまでも宣誓年の位置関係を探ることを主眼になされた分析である。

図中の数値は西暦年を表し、「70」は1970年夏に行われた宣誓、「10h」は2010年春（「h」は春を表す）に行われた宣誓を意味する。2次曲線の形態をした分布の中で、左上（第Ⅱ象限）から右下（第Ⅲ象限、第Ⅳ象限）、さらに右上（第Ⅰ象限）の順で、ほぼ年代の古いものから新しいものへと推移していることがわかる。まず、第Ⅱ象限を中心に布置された語彙群（Aグループ）は70年代から80年代にかけてのものが多く、「スポーツマンシップ」（図では「スポ」と省略）や「則り」「我々」など最近ではほとんど聞かなくなった語彙が並んでいる。

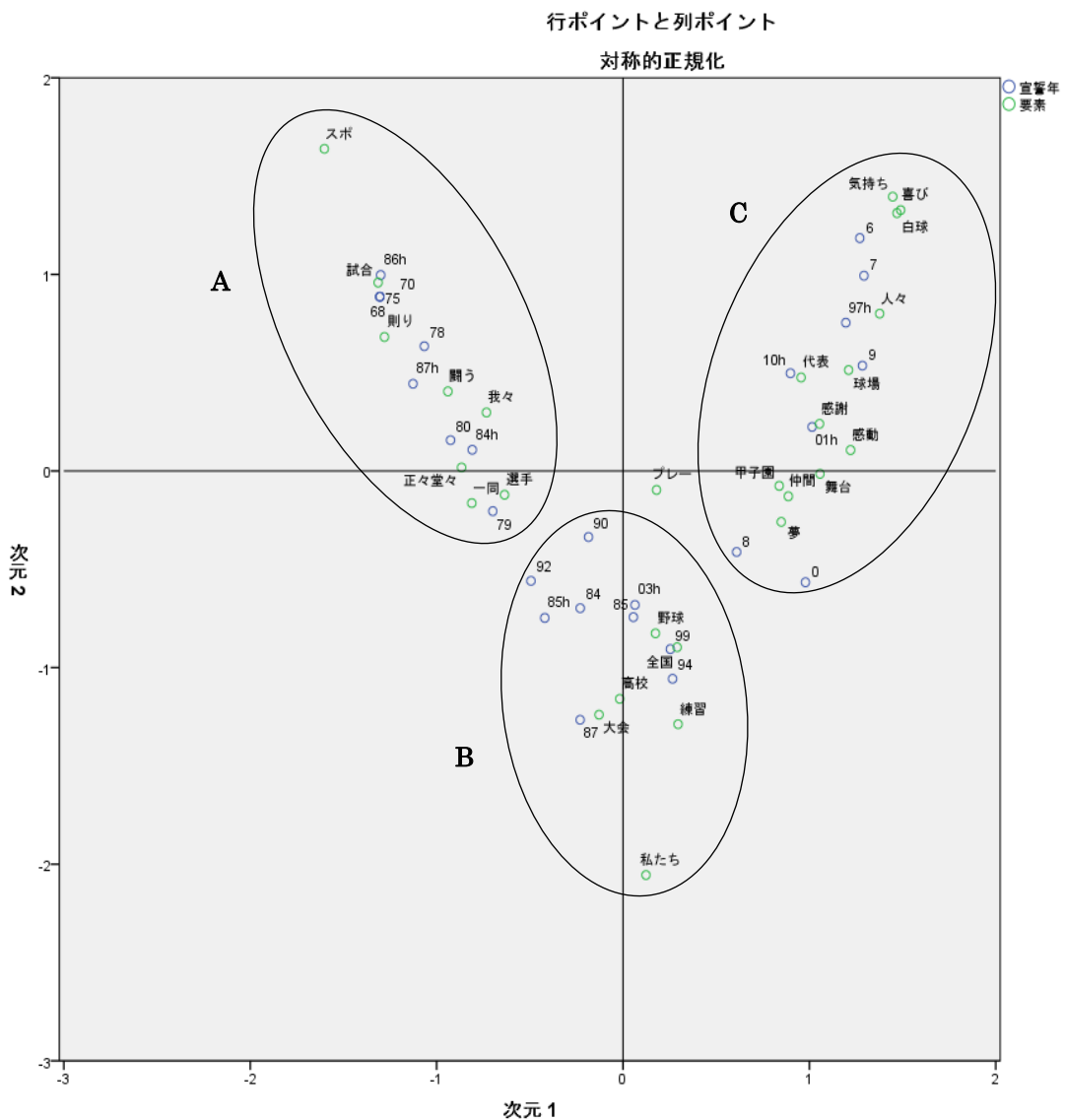


図 3

70年代以前の定型的宣誓に典型的な語彙群である。一方、第Ⅲ象限と第Ⅳにまたがる語彙群(Bグループ)は80年代から90年代にかけての出現語彙であり、そこでは「我々」に代わって「私たち」(また、図には現れていないが「僕たち」も)という日常語が出現している。また、「野球」「練習」など日常の活動の上に「全国」「大会」という大きな夢をつかみ取ったことが表現されている。最後に第Ⅲ象限から第Ⅳ象限にかけての語彙群(Cグループ)は、00年代以降の宣誓が中心である。「甲子園」「舞台」「夢」「仲間」などはBグループと関連しながらも、「人々」に「感謝し」、「人々」に「感動」を与える「喜び」などの「気持ち」が露わになっている。

A→B→Cという変化を再度まとめると、次のようになる。Aに属する語彙からうかがえることは、選手たちが自分自身の行動、つまり勝利を目指して闘うという行動に専心していることである。その視点は、自分たちがこれから競技するグラウンド以外にはない。まさにこれから闘う者としての意気込みのみを語るものである。

Bに属する「全国」「高校」「野球」「大会」は、これをそのまま並べても出現しそうな複合語になるが、現実の宣誓文ではそれぞれが単独で使われているものも多い。「野球を愛する」「野球できる喜び」「全国の高校生へと」「全国4027校の代表として」などである。また「練習」については「日頃から鍛えた練習の成果」「気力で継続してきた練習を信じ」などの文脈で出現している。これらの語彙が表すものは、これまでの練習の思い出、またいまこの甲子園球場に立っているということの感慨である。これらがAと大きく異なるのは、1)視点が過去のことに注がれていることであり、2)全国の高校球児に思いをはせていることであり、3)野球をすることそのものへ思いが語られることから、「野球をする自分」という視点のあることである。この変化を一言でいえば、球場内の現在という視点から、球場外や過去への視点、またそこからさらに言えば、現在の自分を客観視する視点へと広がりを持ったということである。

さらにCの「夢」「舞台」「甲子園」「球場」などが表すことは、甲子園が夢舞台とみなされるように劇場化したことであり、そこでのプレーを通じて「人々」に「感動」を与えるというものである。従来の「競技者」に加え「演技者」としての意識が垣間見える。一方で「感謝」「喜び」「気持ち」などはBと共通する「野球をする自分」を見つめた上で出てきた思いである。

以上、宣誓が語られる「視点」という観点から、それぞれの語彙群の特徴をまとめれば次のようになる。

- A 視点・・・グラウンド内の選手としての現在の視点
- B 視点・・・グラウンド外の選手や過去に向けた視点
- C 視点・・・演技する者として、観衆に向かう視点

なお、実際の選手宣誓文は、BにはAの要素も含まれており、またCにはA、B両方の要素が含まれていることが多い。つまり、後の時代ほど宣誓文が長くなり、この3種の要素を取り込んだものとなっている。

4. 宣誓文変容の背景にあるもの

さて、このような、A→B→Cという変化が生じるには、そこにどのような背景があるのだろうか。以下では「抑制からの解放」「競争から共生へ」「競技から演技へ」をキーワードとして考察する。

4. 1. 抑制からの解放

まず、この変化を通じて通奏低音のごとく響いているのは、抑制的行動から徐々に解放されていく国民精神の変化である。言語、非言語にわたる日本人の抑制行動は、外国人からはよく「腹芸」「曖昧」などと言われてきた。確かに21世紀に入った現在でも、世界平均値からみれば、おそらく日本人のコミュニケーション行動はまだ抑制的と映るだろう。また、2007年の夏の全国高校野球大会で活躍した斎藤祐樹投手の「抑制」(中野 2007)への賞賛は、日本人の国民性の中に「抑制」を美徳する文化が残っていることを示している。しかしながら、抑制の程度をみていけば、吉見(2007)の言う「戦後社会」と「ポスト戦後社会」とでは明らかに異なる。吉見によれば、戦後社会とは1945年から高度経済成長を経て日本社会が物質的に豊かになったおよそ30年間をいう。この時代は日本がいわば一丸となって豊かさへ邁進した時期である。東京オリンピックや大阪万博はその象徴であり、各家庭では「3種の神器」が普及した。このような時代においては、誰もが描く標準的な目標達成のためには自分の願望や自由をとりあえず抑制する力が働く。

この時代のスポーツシーンにおいても同様の力が働いている。漫画は「スポ根」ものが流行り、「根性」や「がまん」などが称賛された。練習中どんなに水を飲みたくても飲まないのが「根性」のある者であり、肩を痛めようが必要があれば何連投もするのが投手のあるべき姿であった。このような中であって、東京オリンピックのマラソンで銅メダルを取った円谷幸吉選手のケースは痛々しい。彼は1968年開催のメキシコオリンピックにも日本代表として出場予定であったが、1968年1月に「もう走れません」という遺書を残して28歳で自

ら命を絶った。Otomo (2010) が的確に記述しているように、「円谷はアスリートである前に自衛隊員であった」が、当時の国民的期待の程度は現在と比べて桁外れに大きく、そのための自己の「抑制」は至上命題だったのだろうと推測される。

一方 1970 年代後半以降は、当座の物質的豊かさを達成した日本人の意識は「一億総中流」となり、その関心は自分自身のことや自己実現へとシフトし、本当の意味での価値観の多様化や個性化が始まったと考えられる。したがって「ポスト戦後社会」とは、国民的目標（その最たるものが戦後の貧しさから脱却すること）の中でおさえられていた個性の表現が、芽を出し、成長していった時期なのである。これに関して、小熊 (2009) の考察を踏襲すれば、正確には、その芽はすでに出ていたともいえる。すなわち、1968 年から始まる学生運動に関する小熊の立場は、これを一般に言われている政治運動とするのではなく、一種の「表現行為」とするものである。貧困・戦争・飢餓といった途上国型の「近代的不幸」からアイデンティティの不安や生の実感の喪失という「現代的不幸」に入りかけた若者世代の表現行為だったとするのである。筆者は、小熊の言う「表現行為」と一般に言われている社会正義に発した「政治運動」の割合は、7 対 3 くらいではなかったかと思う。そして、おそらくこれは、当の若者世代（団塊世代）が受けてきた戦後教育なくしては出現しなかった現象であろう。

4. 2. 競争から共生へ

B 視点、つまり空間・時間の広がりの中で自分を客観視する視点はどのようにして生まれてきたか。これを見事に体現しているのは 94 年夏の大会の選手宣誓である。以下全文を掲げるが、当時としては最長の宣誓であった。

宣誓。野球を愛するわたくしたちは、あこがれの甲子園球場から全国の仲間
にメッセージを送ります。ファイト、フェアプレー、フレンドシップの頭文字の「F」のマークをあしらった高校野球連盟の旗のもと、わたくしたち選手一同は、苦しいときはチームメイトで励まし合い、つらいときは、スタンドで応援してくれている友人を思い出し、さらに全国の高校生へと友情の輪を広げるため、ここ甲子園の舞台上で一投一打に青春の感激をかみしめながら、さわやかにプレーすることを誓います。

「全国の仲間」「チームメイト」「友人」「友情」などが表すことは、自分たちが甲子園のグラウンドにいることを自分たちだけの問題とはせず、スタンドにい

る選手、地方大会で敗れ去った大多数の高校球児とともに、その心境を分かち合おうとしていることである。勝敗ではなく、野球を通した高校球児の一体感が謳われている。競技者というよりは球児への讃歌とみなせる。この宣誓を行った杉村衡作氏（当時山口県光高校野球部主将）に 2007 年にインタビューしたところ、この宣誓文はほぼ自分一人で作ったということや、内容はほぼ本音であり、演技しているという意識はなかったという述懐を得た。この世代は 1976 年生まれで、すでにポスト戦後社会の世相の中で育っている。競争原理意識は減少し、教育の場でも優劣をつけないやりかたが主流となっていた。また 1980 年代は校内暴力の後いじめが広がった時期であり、このような中で周りを配慮する意識が強く表れたとも考えられる。

90 年代は日本社会に共生意識が芽生えた時期であり、環境との共生、弱者との共生、多文化共生など共生原理を尊ぶ現在の日本社会へとつながっている。

4. 3. 競技から演技へ

では、視点 C=演技する者として観衆に向かう視点はどこから生じたか。これは、杉本（1994）が指摘するように、メディアが作り出した「劇場としての甲子園」という要素が大きい。純粋な競技者としてよりも甲子園という劇場で演技をする者としての視点である。メディアの中でもテレビの実況中継はもっともその影響力があるものである。テレビが映し出す世界は、試合の模様を忠実に映しているようで、実際には、観衆はその実況放送が作り出す世界の中でひとつの物語を見せられている。それは実際に球場に足を運んでみるとよくわかる。実際の球場では、アナウンサーの実況もなく、出場校の紹介ビデオもなく、また選手やスタンドの応援団の表情のクローズアップもなにもないのである。テレビ実況よりははるかに迫力のあるブラスバンド演奏を挟みながら、試合そのものは実に淡々と進んでいく。つまり、テレビは視聴者に物語の語り部として存在しており、視聴者はそれと意識せずにその世界に引き込まれているのである。テレビの影響力は、出場選手たちを見られることに敏感にさせる。ホームランを打ってダイヤモンドを回る選手の誇らしげなガッツポーズ、ピンチの場面で打者を三振に取った投手の歓喜のガッツポーズ。抑制の取れた自己表現と、見られているという意識の相乗作用で、プレーの結果に対する自己アピールが隆盛である。

また、メディアによってヒーローが作られていくことも彼らを演技者に仕立て上げる要因になっている。2007 年夏の大会の田中投手（現楽天イーグルス）と斎藤祐樹投手（現日本ハムファイターズ）は記憶に新しい。斎藤投手には「ハンカチ王子」というニックネームまで与えて印象付けが行われた。

選手宣誓を担当する選手にしても、それは開会式の花でありヒーローとなれる瞬間でもある。宣誓後のインタビューコメントを聞くと、「歴史に残るような宣誓を」「みなさんを勇気づける宣誓を」などが一般的となり、球場の観衆やテレビの前の全国の視聴者に見聞きされることを意識したものとなっている。1970年夏の大会で宣誓した松崎登氏（当時、熊谷商業高校野球部主将）が語られた「間違えないように、恥をかかないように」という意識とはずいぶん違ったものとなっているのである。（2008年3月、氏へのインタビュー資料による）

おわりに

スポーツの人気度を経年的に調査している読売新聞社の2010年調査資料によると、「観ることが好きなスポーツ」の順位は、1位がプロ野球、2位がサッカーで、高校野球はそれに次いで第3位という人気抜群のスポーツである。また日本高校野球連盟のホームページによれば、全国の高球児の数は概算で15万人を超えている。この15万人の中から、わずかの球児が選ばれて甲子園に出場する。きわめて狭き門である。1984年夏の大会で画期的な選手宣誓を行った坪井久晃氏（当時、福井商業高校野球部主将）は「東大を狙うのは何回かできるけど、甲子園を狙うための高校選びは1回しかないから、そちらに賭けました」と、くったくのない笑顔で話されたのを思い出す。（2007年9月、氏へのインタビュー資料による）

開会式の選手宣誓は、「聖地」甲子園に行きたいという球児たちの熱い思いと、全国的な高校野球人気を象徴するものである。そういう意味で、選手宣誓の移り変わりは、選手個人の単なる個性や趣味ではなく、時代を反映したものと考えざるを得ない。「宣誓は世につれ、世は宣誓につれ」である。

引用・参考文献

- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編）2010『言語研究のための統計入門』くろしお出版
- 江刺正吾・小椋博（編）1994『高校野球の社会学 甲子園を読む』世界思想社
- 小熊英二 2009『1968』上巻・下巻 新曜社
- 佐藤卓己 2010「青年の主張」のメディア史 日本経済新聞 3月31日付朝刊

- 陣内正敬 2009 『高校野球・選手宣誓に関する資料集』 科研費報告書
- 陣内正敬 2008 言語行動としての高校野球・選手宣誓—スポーツ言語文化論
の事例研究— 『語学教育フォーラム』 16 大東文化大学
- 杉本厚夫 1994 劇場としての甲子園—高校生らしさの現実— 『高校野球の
社会学』 世界思想社
- 中野 翠 2007 『斎藤祐樹くんと日本人』 文芸春秋社
- 西村秀樹 2009 『スポーツにおける抑制の美学』 世界思想社
- 樋口耕一 2009 『KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル』
- 吉見俊哉 2008 『ポスト戦後社会』 岩波書店
- Rio Otomo 2011 Narratives, the body and the 1964 Tokyo Olympics
『大分大学国際交流センター年報 2009 年度』 大分大学

How has the high-school baseball player oath changed?

JINNOUCHI, Masataka

In this paper, the declarations (player's oaths) by senior high school baseball players at Koshien stadium every year are analyzed from the viewpoint of the modification of the texts. In result, 26 texts from 1968 to 2010 are divided into three groups according to the time. First group (named "traditional type") consists of the oaths from 1968 to 1983, that is traditional and stereotyped version made up of almost the same vocabularies and expressions. Second group ("innovation type I") is from 1984 to 2000, that has variety and individualities. Third group ("innovation type II") is from 2001 ahead, that has the same character as the former but is different in that has entertainer's viewpoint in the texts.

In conclusion, the reason why this kind of modification has occurred is that "liberation from restraint" emerged among Japanese young people after 1980s, and furthermore, "players as entertainers" consciousness has also emerged after 2000s.